

【はじめに】

皆さま、広報部です。診断士の各種活動やイベント、仕事としての研修講師などの中で、参加者の興味を引きつけ、飽きさせないようにする効果的なコンテンツに“ゲーム”があります。これらは、そう簡単に開発できるものではありませんし、ちょっと調べてすぐにものにできるものでもありません。今回の特集は、そんなゲームをご紹介します。

【「目から鱗」のコミュニケーションゲーム】

2月28日(土)に城北支部の企業経営研究会定例会が開催されました。今回は「コミュニケーション」をテーマとして講師の宮川雅行先生に3部構成で講演いただきました。

◇第1部 コミュニケーションゲーム・・・ミッション完了タイムレース

・ゲームの概要

参加者は今日初めて顔を合わせる方もいる中で5人で一チームになり、1名が課長、2名が先輩、2名が後輩となり背を向けて席に着きます。課員間の伝達はメモのみで行い言葉は使えません。また、メモは階層を通すこととし階層を飛び越すことは出来ません。メンバー各自に封筒が渡され、スタートの合図で封筒を開け、中の指示書を読んでゲーム開始です。



・なんだこれは??・・・思い込みの恐ろしさ

ゲームの最終ミッションはあるのですがメモのみの伝達のため、開始当初はメンバー間で状況や情報が共有できません。また、思い込みが邪魔をしてしばしゲームは膠着状態でした。誤った思い込みであることはメモだけではなかなか相手に伝わらず、また思い込みの修正がなかなかできず、時間だけが過ぎていきました。直接言葉を交わしたり、直接相手の状況を見て確認できないことのもどかしさを感じさせられました。

・何をすればいいの?なんでこうなるの?・・・確認の大切さ

また、先輩や後輩も何をすればいいのかわからず指示待ち状態になりました。メモが回ってきても情報が錯そうし混乱が収まりません。正しい情報がどれなのか確認するにもメモをまわさなければならず、時間がかかりました。特に先輩が情報の通過点になるのでその仕訳に追われて大変でした。沢山のメモで状況を確認し合いながら正しい情報を共有し、最終ミッションを達成するまでの時間を競うタイムレースゲームでした。



・コミュニケーションの大切さ!

課員全員がミッションを完了し顔を合わせて反省会をする時は皆さん笑顔で大笑い。「目から鱗」の会話が盛りあがっていました。言葉が交わってお互いの状況を目で確認できればなんてことはないミッションだったのです。

組織の中ではこうした混乱は往々にして起きることです。これを防ぐには「思い込みの恐ろしさ」「確認の大切さ」を認識し、コミュニケー

ションを取って情報を共有することがいかに大切であるか、参加者全員が身をもって体験できました。

本来のコミュニケーションは人間と人間が1対1で五感をフルに活用して行うものであり、特にネット社会が進行した昨今は電子メールなどの文章だけでなく顔を合わせたコミュニケーションが大切であることを、ゲーム後の総括で宮川先生は熱く語られました。また、情報を発信する側も自分が当たり前と思っていることも、相手にとっては必ずしも当たり前ではないということがあり得るので、そのことを十分に想定して情報の発信および受信をすることが必要であることを、別のミニゲームを通して効果的に学ぶことができました。

◇第2部 エゴグラム (自我状態) 診断

金子書房が出しているTEGIIと言う診断ツールを使い、自分のエゴグラムを診断後、思考・行動傾向の解説を受けました。皆さん診断結果に納得(?)。コミュニケーションを取るときには自分と相手のエゴグラムを認識していることも必要ですね。

◇第3部 ビデオ学習

最後に、お客様とのコミュニケーションの取り方を追求し成功している事例をビデオ学習し、参加者の皆さん満足感をもって本日の研究会を終了しました。

◇城北支部 企業経営研究会について

当研究会では、財務・経理の勉強をコアとして、企業経営全般について研鑽を積んでいます。代表者の宮川先生は金融機関の専任社員に対する財務・経理の研修会講師をされておられ、企業経営全般に広くて深い見識を持っておられます。研究会では知識の勉強会だけでなく今回のように体験的な勉強会や、ビデオ学習等を行っています。

当会のモットーは「フリー&オープン」です。どなたでも参加いただけますのでお気軽にご参加ください。特に話題を提供いただける講師の方、大募集中です。

なお、今回実施したゲームを詳しく知りたい方、また顧問先などで実施してみたい方は、連絡いただければ宮川先生が直接指導して下さるそうです。

宮川先生の連絡先 : myage-rmc@air.ocn.ne.jp

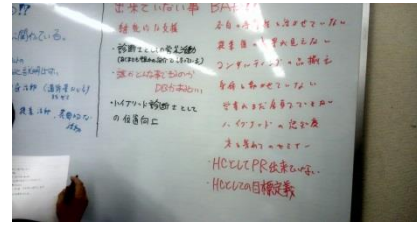
城北支部 片桐 文夫

katagiri230@yahoo.co.jp

この日のテーマは、研究会が推進している「ハイブリッド・コンサルタント」に関するブレインストーミングが行われました。ハイブリッド・コンサルタントとは、「さまざまな分野での職務経験、中小企業診断士ならではのスキルを加えて、ライトなコンサルティングニーズにお応えする」ことを目指したものです。診断士（特に企業内診断士）にとっては、業務で培った専門知識・ノウハウを活かす場ができ、依頼主は「本格的なコンサルを依頼するには予算もないし気も引けるが、相談は乗ってほしい課題がある」というニーズが満たせる、という両者がメリットを得られる仕組みです。専門分野も診断士の活動状況もさまざまな会員たちから活発な意見が出されていました。ホワイトボード左側には「実務案件に関わるキッカケになった」「研究会という仕組みがあることで人が集めやすい」などのメリットが。しかし、右側には、出来ていない課題が多く挙げられていきます。具体的には、「営業活動をどうしてもやれない」「診断士の認知度が低い」「ハイブリッド・コンサルタントの目標や定義をもっと明確化すべき」などです。全体で意見交換を行うと、ハイブリッド・コンサルタントの活躍の場を広げていくためには、企業内診断士のノウハウや専門知識のPRを強化して、企業に知ってもらうことが重要という意見が多く出されました。そのためにも、サービスのメニュー化、ビジョンの明文化、個人が積極的な営業、ゆるキャラを作ってPRなどさまざまな意見が出されました。企業内診断士は特に、高い専門性を持ちながら、それを活かす場に出会えなかったり、1人のノウハウだけでは、形になるものにならない等の課題を抱えています。この研究会・プロジェクトでは、他の診断士が持つノウハウを活用して自身の不足分を補ったり、中小企業の身近な悩みごとにも触れられる機会に出会えるなど、さまざまな可能性を秘めています。また、動き出したばかりのプロジェクトだからこそ、新たな診断士の参加が求められています。



多種多様な診断士が集まり、盛り上がるディスカッション



多くの課題が (赤字)



懇親会も賑やかに



本年より城北支部に所属し、さっそく第2期城北プロコン塾で勉強をしています。

長くIT業界にいたこともあり、中小企業のIT活動支援を中心に活動をしたかったもののなかなか企業のニーズに出会えませんでした。クラウド」「ビッグデータ」「スマートフォン」等の単語が徐々に浸透し、最近は少し風向きが変わってきたようにも感じています。これからはITが社会インフラとして不可欠となり、IT環境を無視することができない時代になりつつあると感じています。これからの時代に有効な中小企業向けのIT活用支援を中心に広く貢献したいと考えております。まだまだ勉強中です。私は前回の東京オリンピックの年に生まれ、マンガやアニメ等が幼少の時から当たり前に存在していてこれらの娯楽を毎日享受する一方で日本の伝統的な文化に造詣の深い教師（小説など本を読んだうちに入らない」と公言する方がいたのは今では考えられないかも知れません）の教えを受けてきた世代でもあり、クールジャパンという表現で一括されている日本の文化をもっともっと掘り下げてその価値を探ってみたい、もしできるならビジネスにも応用してみたいなども考えています。文化的な価値のあるものから紅葉までの「日本らしいもの」を散策しながら見つけるのが好きなので、出張のような機会を期待しているのですが、なかなかチャンスがなく、先の長い夢になりそうです。

【本誌に関する皆さまのご意見、ご要望をお待ちしております】

①皆さまがお持ちの“ネタ”を提供してください

- ・研究会・区会の活動を紹介したい、または、ご自身のセミナーを紹介したい。⇒広報部員が潜入します
- ・ご自身の特技を紹介したい。支部内の方と交流したい。⇒「今月の城北人」のコーナーで紹介します
- ・診断士としてのノウハウを紹介したいなど ⇒特集記事化します。

②皆さまが知りたいことを教えて下さい

- ・企業内診断士の活動状況が知りたい。
 - ・独立するには、どうしたらいいかを知りたい。
- ⇒各種 特集を組んで記事を作成します。

③読者としての（批判も含め）感想をお聞かせください

- ・批判的な内容もお願いします。今後の改善に活用させていただきます。

④本誌編集スタッフ募集中

- ・「隙間時間にちょっと」「アイデアを出すだけ」でも構いません。
- 問い合わせ先 城北支部広報部: johoku.kouhou@gmail.com まで よろしくお願ひ致します。

JOHOKU SHINDAN 誌 ～第5号 ユニークなコンテンツ～

2015年4月16日発行

発行者:城北支部長 朝倉久男

編集者:城北支部 広報部